The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「カレコレ」の語史 ： 品詞の転成の問題に絡めて
Author(s)	清田, 朗裕
Citation	語文. 2010, 95, p. 48-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「カレコレ」の語史

――品詞の転成の問題に絡めて――

清田朗裕

一　はじめに

本稿の目的は、カレコレという並列複合語の語史を記述し、その変遷過程を考察することである。[1]

現代日本語において、カレコレは、数量詞を後接する。

（1）a大阪に来て、かれこれ四年が経ちました。

　bふと思い出したのは、かれこれ20年ほど前にタクシーの運転手になった女性の言葉だ。

（朝日新聞朝刊、二〇〇八年一二月二二日）

また、数量を概数化するため、「ほぼ」や「大体」といった概数化する語と置換可能である。

（2）a大阪に来て、ほぼ四年が経ちました。

　bふと思い出したのは、大体20年ほど前にタクシーの運転手になった女性の言葉だ。

清田（二〇一〇）（以下、前稿と呼ぶ）では、現代語のカレコレが数量詞のみを後接するという構文的特徴に注目し、カレコレは数量詞を主名詞とした「連体詞」であると述べた。これは、（3）のように表せる。

（3）［NP［Adn カレコレ］［Q］］

なお、本稿では、カレコレが数量詞を後接する用法を、「連体詞的用法」と呼んでおく。[2] 前稿では、昭和以降（特に一九四〇年代以降）に生まれた作家等が用いるカレコレが、時間に関する数量Qを後接する例に偏っていることを指摘した。

ところで、近代では、カレコレが助詞を後接する例や述語に前接する例がみられ、現代語のカレコレとは異なるふるまいをみせる。

（4）aそれからあの細君が一緒に東京へ帰ってくれと言出した時に、先輩は叱ったり・したりして、丁度生木を割くように送り返したことを思出した。かれこれを思合せて考えると―確かに先輩は人の知らない覚期を懐にして、こ

の飯山へ来たらしいのである。　（破戒）

b特に自分の如き次官が先に立って部外の人事をかれこれ言うように思われては甚だ困る。　（山本五十八）

（4）aのように、カレコレが名詞としてふるまうものを、「名詞的用法」、（4）bのように、副詞としてふるまうものを、「副詞的用法」と呼んでおく。

これらの例を踏まえると、カレコレは、歴史的に、連体詞的用法を獲得し、かつ名詞的用法、副詞的用法が衰退するという変遷過程があったと予測される。

従来、「連体詞」という品詞について述べる際、副詞と共に、扱いに困る品詞であるということが言われる。そもそも、連体詞という品詞を立てない立場もあり（加藤二〇〇三等）、また、品詞としては一応認めつつも、接頭辞や造語成分との境界が必ずしも判然としないという指摘もある（金水一九八三）。それでもいわゆる学校文法や庵（二〇〇一）のような概説書において一品詞として認定されているのは、「連体修飾の機能のみをもつ」という点を重視するからに他ならない。とはいえ、連体詞と呼ばれる品詞は、歴史的には、他の品詞からの転成によって生じたとされ、元々連体詞だったと考えられる語は確認されていないようである（橋一九七三、金水一九八三等参照）。

品詞がその所属を変えるという現象は、非常に興味深い現象だと思われるが、これまで、連用転成名詞といった、動詞の名詞への転成や、副詞の接続詞への転成といったものについては研究があるものの、連体詞への転成については、単純に固定化・慣用化したと考えられているためか、詳細な記述はほとんどみられない。

そこで本稿では、カレコレを例にとり、連体詞へと転成する過程を記述し、歴史的変遷を遂げた要因を考察する。

二　現代語のカレコレの特徴

現代語のカレコレについては、川端（一九六七）、森山（二〇〇一）、また、前稿に言及がある。以下、それらを参照しつつ、現代語のカレコレの特徴について整理する。

二・一　カレコレの意味的・構文的特徴

川端（一九六七）は、カレコレを、概数量を表すとして「ほぼ、大抵、お（ほ）よそ、大方、あらかた、ざっと、大体」とともに、次の二つの性格があると考えている。

（5）a一なる全体における量的大小のその大を意味する

b明確量的である数詞そのものの全体を概数化する

（川端一九六七・二一-二二参照）

確かに、すでに（2）でみたように、カレコレは「ほぼ」「大体」等と置換可能である。ただし、カレコレには時間に関する数量Qが必ず後接するのに対し、「ほぼ」「大体」は、用言や体言を後接できることから、構文的特徴は、かなり異なっている。

（6）a太郎は解答を｛＊カレコレ／ほぼ／大体｝書いた。

b今日の授業は｛＊カレコレ／ほぼ／大体｝静かだ。

c太郎の解答は（＊カレコレ／ほぼ／大体）正解だ。

また、川端（一九六七）は、副助詞と共起可能であることを指摘している。

（7）かれこれ百五六十人くらゐ　（川端一九六七・二二）

（7）は、カレコレがすでに明確量的である「百五六十人」を概数化しているのに対し、副助詞「くらゐ」においても概数化している。日本語では、このような概数化の重複は許される。ただし、前稿で調査したところ、「百五六十人」のように時間以外の数量Qがカレコレに後接する例は、ほとんどみられなくなっており、時間に関する数量Qが後接する例に限定されている。従って、後接する数量詞の限定が進んでいると考えられる。

ここで、数量詞の品詞性について確認しておこう。

数量詞は、一般に格助詞を後接せずに副詞的に用いることができるが、後接することも可能である。また、コピュラ動詞を伴い、名詞述語文を作ることができる。そのため、数量詞に名詞の性質を認めうる。

（8）a大阪に来て、四年（が）経ちました。

b大阪に来て、もう四年です。

従って、（3）に示したように全体で名詞句を構成していると考える。

風間他（二〇〇四）によれば、日本語における数量詞を、「1」「2」などの数詞に「人」「個」「匹」などの助数詞（類別詞）が続いたもの」とし、また、「名詞の直前に置かれるのが原則である」とする（七三頁）[3]。しかし、風間他（二〇〇四）でも述べられているように、数量詞は名詞の直前以外にも表れうる。

（9）a三人の男が来た。

b男が三人来た。

c男三人が来た。　（風間他二〇〇四・七三―四参照）

奥津（一九九六）は、これらの構造を、それぞれQノN型、NCQ型、NQC型と呼んでいる（八六頁参照）。そして（9）bを数量詞遊離、（9）cを数量詞移動と呼ぶ。ただし、（9）bのようなNCQ型は、格助詞がガ格、ヲ格の場合のみ許されるという条件がある。従って、それ以外の斜格では不適格になる。

ここでカレコレとの関連で注意されるのは、NQC型である。「カレコレ＋数量詞」という構造が、NQC型のようにみえるのである。この構造に合わせると、カレコレが、一見、名詞であるかのようである。

（10）大阪に来て、かれこれ四年が経ちました。

しかし、カレコレを名詞と認めるには問題がある。なぜなら、格助詞を後接できず、かつ、数量詞を必ず後接させなければ不適格になるからである。

（11）＊a大阪に来てかれこれが四年経ちました。

＊b大阪に来てかれこれの四年が経ちました。

＊c大阪に来て、四年のかれこれが経ちました。

（11）a、bに示したように、格助詞、連体助詞が後接すると不適格になる。また、（11）cのように、連体助詞ノを前接するこ

とも許されないため、現代語のカレコレは名詞とは認めがたい。森山（二〇〇一）も、カレコレを連体詞とする。

なお、後の議論に関わるので、数量詞の二種について触れておく。数量詞には、数量を表す数量Qと、属性を表す属性Qがある。

（12）今年の八月は、十日間の旅に出た。

「八月」は属性Q、「十日間」は数量Qを表している。

ところで、カレコレには、類似の複合語としてアレコレがある。ここで、現代語のアレコレについてごく簡単に確認しておく。

まず、アクセントについて。金田一・秋永編（二〇一〇）によれば、カレコレは頭高型なのに対し、アレコレは中高型のアクセントである。これは、複合語のアクセントは前項のアクセントを生かすために、カレが頭高型であること、それに対しアレは平板型であることが影響していると考えられる。

次に、アレコレは、「色々」といった意味をもつ（金水・木村・田窪一九八九）。従って、細かな違いは感じられるものの、「色々」と置換可能である。

（13）a あれこれ考えたが、結局決まらなかった。

（金水・木村・田窪一九八九・八二）

b 色々考えたが、結局決まらなかった。

また、金水・木村・田窪（一九八九）では、「副詞的に用いられる」とするが、格助詞を後接したり、ノが前接し連体修飾を承けたりして、名詞として用いられている例もみられる。

（14）おかげで朝の用事がすむと、10組ほどの母子連れが毎日のように我が家の縁側に集まり、子育てのあれこれを教えてくれた。（朝日新聞朝刊・二〇〇九年一月六日）

このように、現代語においてアレコレにはカレコレにおける名詞的用法、副詞的用法が確認できる。ただし、カレコレとの大きな違いとして、数量詞を後接することができない点が挙げられる。

（15）＊大阪に来てから、アレコレ四年が経った。

それでは、カレコレは歴史的にどのような様相を呈し、また、変化を遂げたのだろうか。特に、現代語にみえる「ほぼ」「大体」等と置換可能な概数化という意味用法は、いつ頃、どのようにして生じたのであろうか。現代語にみえるような時間に関する数量Qを後接する用例は、いつ頃からみられるのだろうか。カレコレの変化は、単純な固定化・慣用化によるものなのであろうか。

三　中古から近代にかけてのカレコレ

本節では、古典語におけるカレコレについて調査した結果を述べる。カレコレの初出は中古であったため、中古から、カレコレの語史を記述する。

三・一　古典語のカレコレの先行研究

萩谷（一九六七）は、カレコレが漢語「彼此」の直訳であり、純粋な和語としては「コレカレ」があることを指摘している。つまり、純粋な和語としては、「コ―カ―」という語構成になるということである。これに関して、橋本（一九八二）、清田（二〇

○八）においても、中古語では、指示詞の複合語は、「コ―カ―」のように「近―遠―」の順になるという、萩谷（一九六七）と同様の指摘をした。[4] 具体的には、「コレカレ」「ココカシコ」「コナタカナタ」等がある。そのため、「カ―コ―」という語構成は、中古語における指示詞の複合語の語構成から逸脱していると考えられ、漢語の直訳であると考えるのが妥当である。

なお、コレカレについては、三吉（一九五六）によって、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』との対照がなされた結果、『今昔物語集』ではコレカレと読まれていた箇所が、『宇治拾遺物語』ではトカクと読まれていることから副詞的用法をもつこと、また、中世以降衰退したことが明らかにされている。ただし、カレコレの意味・用法については、ほとんど言及されていない。

三・二　用例数

具体的な用例を挙げる前に、今回得られた用例数を構文的特徴に基づき、表のように用法毎に示した。

連体詞的用法については、大きく数量Q、属性Qの二種類に分けた。さらに、現代語のカレコレは時間に関する数量Qに偏っていることから、時間に関する数量については、特に別に立てた。ただし、「都合・以上」等の「合計」を意味する語が後接する場合は、その後に数量詞が後接しているため、連体詞的用法の例と考えた。また、スルやイタスといった形式動詞が後接する場合は、名詞的用法なのか、副詞的用法なのか判断しにくいため、曖昧例とした。

表　カレコレの用例数

	中古	中世前	中世後	近世前	近世後	合計
名詞	9	20	8	31	54	122
副詞		3	6	21	66	96
数量Q		14	2	14	6	36
属数Q				1		1
時数Q			1			1
時属Q					2	2
曖昧		0	4	2	8	14
合計	9	37	21	69	136	272
		58		205		

以下、カレコレの語史を記述し、四節で考察を加える。

三・二　中古におけるカレコレ

中古において、カレコレは九例確認できた。格助詞を後接する例が多くみられ、また、並置の例と考えられるものがみられた。

(16) a よめるうた、おほくきこえねば、かれこれをかよはして、よくしらず。（古今集・仮名序・一〇〇）

b 我知り語らひし縁たち呼び集め、またその外、かれこれの君達などをもあまた招き寄せて、心を遣りたる作り言どもして、若き人々多くあらすめり。（狭衣・一・八三）

cかれこれ、しるしらぬ、おくりす。　（土左・二七）

（16）aは、「（僧喜撰が）詠んだ歌は、多く伝わらないので、色々な書物や伝承などを調べてあたってみても、よく分からない」と解釈されるものである。従って、意味としては、「書物や伝承等」といった、「僧喜撰について書かれた情報」を表していると考えられる。（16）bは、後に「あまた」とあることから、「誰彼」と訳すことができ、（16）cは「しるしらぬ」という、「知っている人も知らない人も」と訳される準体句と並置していると考えられ、「あの人もこの人も、知っている人も知らない人も」と訳すことができるものである。

中古におけるカレコレは、このように用いられている。

三・三　中世におけるカレコレ

中世全体では、カレコレは五八例確認できた。中世前期から、数量詞と共起する連体詞的用法、また動詞の項とならない副詞的用法の例がみられるようになる。

（17）aかつうはか様に人しれずかれこれ恥をさらし候も、しかしながらそのむくひとのみこそおもひしられて候へ。
（平家・一〇・二五五）

bきはめて貧しかりけるに、師匠、死にさまに、銭二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に売りて、かれこれ三萬疋をいもがしらの銭と定めて、京なる人に預け置きて、十貫づゝ取り寄せて、芋頭を乏しからず召しけるほどに、また、他用に用ゐることなくて、その銭みなに成りにけり。　（徒然草・六〇・一三九）

（17）aは、「かつうは」「恥を」とあることから、カレコレを述語「さらす」の項として考えることはできず、「あれこれ」「色々」と訳すことになる。副詞的用法の例である。

それに対して、（17）bのように、数量詞を後接する例が一七例みられた。師匠から譲り受けた遺産のうち、「合計三萬疋を、いもがしらを購入するための銭と定めて」と訳されるもので、カレコレは「合わせて」「合計」という意味を表している。

また、連体詞的用法には、次のような興味深い例が確認できる。

（18）a熊谷・平山、かれこれ五騎でひかへたり。
（平家・九・二〇二）

b又、河原の勧進桟敷崩れの時、本座の一忠、新座の花夜叉、かれこれ四人づゝ、八人にて恋の立合をせしに、「恨みは末も通らねば」と、上げて、言ひ納むる声つまりければ、一忠、咳をして、扇のかなめ取直し、汗を拭ひけるに、花夜叉、「末も通らねば」と、ぶときりに言ひ納めて、笑はれけり。　（申楽談義・四九八）

（18）a、bは、「熊谷・平山」「本座の一忠、新座の花夜叉」がカレコレの直前に並置されている。（18）aは、「合計五騎」と解釈される場面であり、（18）bは「づゝ」とあることから、「それぞれ四人ずつ合計八人」と解釈されるものである。

また、「以上・都合・合テ」と共起する例が観察される。

(19) a角テハ南都辺ノ御隠家暫モ難叶ケレバ、則般若寺ヲ御出在テ、熊野ノ方ヘゾ落サセ給ケル。御供ノ衆ニハ、光林房玄尊・赤松律師則祐・木寺相摸・岡本三河房・武蔵房・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎、彼此以上九人也。

(太平記・五・一六七)

b是ヲ聞テ国司・新田徳壽丸・相摸次郎時行・宇都宮ノ紀清両黨、彼此都合十萬餘騎、十二月二十八日ニ、諸方皆牒合テ、鎌倉ヘトゾ寄タリケル。

(太平記・一九・二八九)

c此陣始ヨリ三所ニ分レテ、西ノ尾崎ヲバ、赤松律師則祐・子息彌次郎師範・五郎直頼・彦五郎範實・肥前権守朝範、並佐々木佐渡判官入道々誉ガ手者・黄旗一揆、彼此、合テ二千餘騎ニテ堅メタリ。

(太平記・三二・二三〇)

(19)aでは、カレコレと数量詞との間に「以上」が介在している。また、直前に「光林房玄尊・赤松律師則祐・木寺相摸・岡本三河房・武蔵房・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎」という、数量詞「九人」の要素が全部列挙されている。彼此によって要素がまとめあげられているのである。(19)bでは、数量詞の具体的な要素に加え、「都合」が介在しており、「餘騎」という概数化する表現も共起している。(19)cでは、「合テ」が介在しており、また、(19)bと同様に「餘騎」がみえ、かつカレコレの直前に「二千餘騎」を率いる具体的な要素がみえる。(19)b、cは概数量と共起するカレコレから、単独でも概数化できるようになるカレコレへの変化の過渡期の例だと考えられる。

中世において、連体詞的用法は、全一七例確認できたが、そのうち一三例が、カレコレの直前に具体的な要素が並置されていた。この並置の仕方は二種類みられた。まず、(19)aのように、後接する数量詞「九人」の名前を全部列挙するもの。そして、(19)b、cのように、それぞれの大将の名前を挙げ、それらが率いる軍勢の数は、というように一部列挙するものである。

また、これまでみてきた例の数量詞は、人数といった具体的な対象であった。だが、次に示すように、中世後期には抽象的な対象を後接する例がみられる。

(20) a或義―此言彼此三両義アルカ、此モ好此モ好ト思テ、トレカマシヤラウ不知様ナヲハトレヲモ載タソ

(史記抄・二・三ウ)

bカレコレ三十年スギサセタマウ

(善光寺如来本懐・中・二四六)

それぞれ「意味」「時間」といった、より抽象的な事柄の数量を表している。特に(20)bは、数量詞の要素がなく、現代語のカレコレと同様に、時間に関する数量Qと共起しており、「ほぼ・大体」等と解釈できる点において注目される。このように、中世には、現代語と同様の例が確認できたことになる。しかし、本調査の結果では、他にこのような例は確認できなかった。

三・四　近世におけるカレコレ

近世では、二〇五例確認できた。近世後期において、副詞的用法が多くみられるようになる。

(21) a客の鼻のあなへ。こよりをいれ。あるひはつめりなど。かれこれとからかう冊に。夜食もでれは。[…]

(東海道中膝栗毛・八編・下・四八二)

b米「[…]。それだから常日頃、妬心らしいが彼是と、時々釘をさして置のに、何だの角だのとしらをきつて、とふ〳〵向ふへ抱こまれて、[…]

(春色辰巳園・初編・二八五)

(21) a、bは副詞的用法の例である。

また、連体詞的用法もみられる。

(22) a京にて色川原、色里にて一座せし人人、世之介下りを、めづらしく、女郎共に、能をさせて、御目に懸るのよし、庭に常舞台ありて、囃しがた、地謡もとより、太夫、脇、番組して、定家、松風、三井寺、かれ是三番、しめやかに、物調子、一際ひくうして、なをやさしく又あるまじき遊興也。

(好色一代男・一・一六八)

b立役の源右衛門を目付とし、文作の三味線引かけて、今や今やと待所に、沢村小伝次おかしがらせ、竹中半三郎に無理酒を汲かはし、小松才三郎に心を残させ、尾上源太郎が病気を浮し、彼是十六人も暮暮の長座敷、はらりと立行跡は、もとの在所となる。

(男色大鑑・二・三九九)

さらに、わずか二例であったが、時間に関する属性Qである「亥刻」「八ツ半」の例が確認できた。

(23) aまた放蕩めが東へうせおつたやら。もう彼是、亥刻じやが、またもどりおらぬ。

(新話違なし・かたたがひ・一三・一五三)

b茶がのみとふても子飼はおらずいつそ夜は明けんかしらぬなどゞまけおしみをいふかれこれ八ツ半にもなればくるわ色里もしづまりて[…](廓の池好・一六・三七六)

なお、表からは、近世後期における数量Qの用例が少ないようにみえるが、この理由については、不明である。

四　考察

前節までに、中古から近世までのカレコレの用例を挙げた。本節では、カレコレの変遷過程について考察を加える。得られた用例に基づくと、構文パターンが、以下のように拡張していくことが分かる。

中古① [カレコレ] (C) [VP]

中世② [NP] (C) [カレコレ] [VP]

③ [N1, N2, ... Nn] [カレコレ] [数量Q] [VP]

④ [N1, N2, ... Nn] [カレコレ] [都合, 以上, ...] [数量Q] (程, 餘騎) [VP]

⑤ [カレコレ] [数量Q] [VP]

⑥［カレコレ］［時間数量Q］［VP］

近世⑦［カレコレ］［時間属性Q］［VP］

また、意味的特徴の拡張は、以下のように考えられる。

中古⑧あれやこれや。誰彼。（①）

中世⑨色々（と）。（②）

⑩合計。（②〜⑥）

⑪ほぼ・大体。（④〜⑦）

カレコレは中古では、述語の項となる名詞的用法が観察される。中世に入ると、様々な構文パターンが観察される。紙幅の都合から、連体詞的用法についてのみ触れると、それが観察されるのは、中世からである。主に軍記物において、カレコレの直前に後接する数量Qの具体的な要素が列挙される例が観察される。④のような、要素の一部が取り上げられ、その属性に該当する数量詞がカレコレに後接している例や、③のように、要素が全部列挙される例が観察される。④の構文は、「都合・以上・合テ」といった「合計」と解釈される語句と概数量を表す「程・餘騎」が共に共起することによって、カレコレは概数化を担う表現だという再分析が生じたと考えられる。重要なのは、以上のような構文的拡張、また意味変化を経た後に、カレコレの直前に数量詞の要素が並置されることなく、「カレコレ＋時間に関する数量Q」という構造をとる構文が観察されるようになったことである。

なお、時間に関する数量との結びつきを強くしたのは、カ系列指示詞のもつ過去の出来事を指示する用法の影響によると考えられる。

以上のことから、単純に普通名詞においても観察される⑤の構造から、⑥の構造を獲得したというわけではなく、③、④といった構造によって「ほぼ・大体」という意味を獲得した後に、⑥へと変化したと考えられるのである。これによって、現代語の時間に関する数量Qを後接するカレコレは、品詞として、名詞から連体詞へと変化する素地が整ったと考えられる。

つまり、構文的特徴の変化と意味的特徴の変化が絡みあいながら、現代語のカレコレへと発達したのである。

なお、数量Qが中世前期から確認されるのに比して、属性Qは近世に入ってから観察される。この点については、明らかではないが、一般的な意味拡張の方向性として、〈具体から抽象へ〉というものがあることを踏まえると、より抽象的であるために、発達が遅れたと予測することはできるだろう。

五　おわりに

従来、連体詞への転成に関する詳細な記述は乏しい。しかし、カレコレの連体詞への転成については、構文的特徴や意味的特徴の変化が絡みあっており、決して単純な慣用化や固定化によって生じるものではない。本稿では、その一例を示したつもりである。

今後の課題として、本稿では、時間の制約上、文学作品を中心とした調査であったために、記録語等については調査していない。また、時間に関する数量Qが観察されたのが、中世後期の資料で

あることからすると、室町時代物語大成等に所収されている残りの資料についても、今後、追跡調査が必要であると思われる。それらについても目配りし、今後、包括的に示していきたい。

【使用テキスト】適宜ルビを省略し、一部通行の字体に改めた。日本古典文学大系（岩波書店）・噺本大系（東京堂出版）：（国文学研究資料館 http://base3.nii.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi）、『室町時代物語大成』1～8（角川書店）、抄物：抄物資料集成『史記抄』『毛詩抄・蒙求抄』『四河入海』（清文堂出版）、『新編西鶴全集』1～4（勉誠出版）、『洒落本大成』2～16（中央公論社）、『日本国語大辞典第二版』（小学館）、『邦訳日葡辞書』（岩波書店）、『時代別国語大辞典室町時代編』（三省堂）

なお、中国語「彼此」に数量詞を後接する用法の有無を調べるため、「台湾中央研究院漢籍電子文献」（http://hanji.sinica.edu.tw/）で検索したが、「二」より大きい数量詞を後接する例はみられなかった。

注

（1）並列複合語という呼称は、盧（二〇〇四）に従った。

（2）尾谷（二〇〇〇）等では、同格数量詞と呼ばれている。

（3）英語では、数量詞には、「many, much, few, little, several, some, both, no」のように、「数詞＋類別詞」以外のものも含まれる（亀井・河野・千野編一九九六参照）。しかし、本稿では、「数詞＋類別詞」であるものを数量詞と呼んでおく。

（4）ただし、カナタコナタといった、「カーコー」の語構成をとる例も後にみられるようになるため、常に「コーカー」という語構成であったわけではない。これも漢語の影響が考えられる。

【参考文献】

庵功雄（二〇〇一）『新しい日本語学入門　ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク

奥津敬一郎（一九九六）『拾遺日本文法』ひつじ書房

――（二〇〇七）『連体即連用？日本語の基本構造と諸相』ひつじ書房

尾谷昌則（二〇〇〇）「遊離数量詞に反映される認知ストラテジー」『言語科学論集』六、京都大学、六一―一〇一頁

風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健（二〇〇四）『言語学第2版』東京大学出版会

加藤重広（二〇〇三）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（一九九六）『言語学大辞典　第6巻【術語編】』三省堂

川端善明（一九六七）「數・量の副詞―時空副詞との關連」『國語國文』三六―一〇、京都大学、一―二七頁

清田朗裕（二〇〇八）「古代日本語におけるカ系列指示詞の様相」平成一九年度大阪大学大学院文学研究科修士論文、未公刊

――（二〇一〇）「現代語における「かれこれ」の様相―歴史的変遷を捉える前段階としてのノート―」『国語国文研究と教育』四八、熊本大学、四〇―五一頁

金水敏（一九八三）「連体詞」大曽根章介他（編）『研究資料日本古典文学12文法付辞書』明治書院、一二二―一二五頁

金水敏・木村英樹・田窪行則（一九八九）『日本語セルフマスターズシリーズ4指示詞』くろしお出版

金水敏・田窪行則（編）（一九九二）『指示詞』ひつじ書房

金田一春彦・秋永一枝（編）（二〇一〇）『新明解日本語アクセント辞典CD付き』三省堂

小松寿雄（一九七三）「『連体詞』の成立と展開―研究史・学説史の展

望」鈴木・林（編）『品詞別日本文法講座5連体詞・副詞』明治書院、五二―六九頁
斎藤倫明（二〇〇九）「第2章語彙史としての語構成史」安部清哉他（編）『シリーズ日本語史2語彙史』岩波書店、三五―七二頁
鈴木一彦（一九七三）「近代文法書および辞書の連体詞一覧」鈴木・林（編）『品詞別日本文法講座5連体詞・副詞』明治書院、一七〇―一七三頁
鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別日本文法講座5連体詞・副詞』明治書院
橋豊（一九七三）「連体詞・副詞と他品詞との関係」鈴木・林（編）『品詞別日本文法講座5連体詞・副詞』明治書院、一四八―一六八頁
築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版
鳴海伸一（二〇〇九）「「相当」の意味変化と程度副詞化」『国語学研究』四八、東北大学、一四―二七頁（左一三三―一二〇頁）
仁田義雄（一九九七）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
萩谷朴（一九六七）『土佐日記全釈』角川書店
橋本四郎（一九六六）「古代語の指示体系―上代を中心に―」『國語國文』三五―六、京都大学、三二九―三四一頁
――（一九八二）「指示語の史的展開」『講座日本語学2』明治書院、二一七―二四〇頁
原卓志（一九九九）「「都合」の意味・用法について」『鎌倉時代語研究』第二十二輯、武蔵野書院、六八―九五頁
三吉陽（一九五六）「「かれこれ」と「これかれ」」『愛媛大学紀要（人文科学）』第三巻第一号、愛媛大学、五五―六八頁
森山卓郎（二〇〇一）「近似値表示の連体詞と副詞―概数規定類と概略副詞類―」『国語学研究』四〇、東北大学、一〇四―一一四頁（左一―一一頁）
山田孝雄（一九二二）『日本口語法講義全』寶文館
廬濤（二〇〇四）「指示語の複合とその周辺」影山太郎・岸本秀樹（編）『日本語の分析と言語類型―柴谷方良教授還暦記念論文集―』くろしお出版、九三―一〇八頁

（きよた・あきひろ　本学大学院博士後期課程）